

北 宮 考

杉 崎 重 遠

坊城右大臣殿歌合は伝宗尊親王筆歌合卷（十卷本）及び類聚歌合（廿卷本）の双方に収録されて伝存してゐる。更に詳しく言ふと前者は第八（前田家本）の親王家・公卿家歌合上の第五番目に、後者は卷第十一（近衛家本）の大皇家上の第三番目にそれぞれ見えてゐて、披講の日時を天曆十年（九五六）八月十一日とすることに於て一致してゐる。只、夫木和歌抄（校註国歌大系本）には天曆十一年とあつて一年の相違を見せてゐるが、固より所收年代より考へて十卷本乃至廿卷本の所説に考ふべきであらう。尙、このことに就ては後に述べるであらう。

歌合の本文に小異はあるが、今はその事に言及するのを避けて、十卷本にのみ存する仮名日記の

天曆十年八月十一日、坊城殿にきたの宮おはしますに、つきのいとおもしろきに、をとこかたをむなかつた、おまへのせざいを
だいにてよめる

——歌合卷（古典文庫本）・下——

の「きたの宮」に就て考へることにしよう。

両歌合卷に関する研究で「きたの宮」に言及されてゐるのは、筆者の乏しい見聞では、
久曾神昇氏の伝宗尊親王筆歌合卷研究——昭和十二年一月発行。

萩谷朴氏の甘巻本「類聚歌合巻」の研究——昭和十四年二月一日発行短歌研究八巻二号所載。

故堀部正二氏の^纂類聚歌合巻とその研究——昭和二十年二月美術書院発行。

の三種である。尙、昭和二十五年六月発行の前掲歌合巻に久曾神氏が解説を執筆されてゐるが、「きたの宮」には觸れられてゐない。

以下三氏の所説を掲げ、その後、私見を記すことにしよう。

久曾神氏の所説は前掲の書物の第二章伝宗尊親王筆歌合巻所收各歌合の研究第八節歌合巻第八第五款天曆十年八月十一日坊城右大臣殿（九条殿）歌合の項に掲げられてゐる。本文は長文なので、「きたの宮」に關係のある部分を摘記すれば、

……夫木抄にはこの前裁合を天曆十一年としてゐるが、師輔の北方とられた三人のうち、勤子内親王（天慶元年薨）、雅子内親王（天曆八年薨）は勿論、康子内親王も天曆十一年六月六日に薨ぜられたのであり、十一年秋には北の宮はなくなる筈であり、歌合記に「きたの宮おはしますに」とあるのと矛盾するので、天曆十年でなくてはならない。

である。次に萩谷氏は、十巻本の仮名日記の引用につづけて、

右の如く此が前裁合なる事明かであるが、茲に謂ふ北の宮とは何誰の事であるか、一体師輔に降嫁し給うた醍醐天皇の三宮の中、勤子内親王は天慶元年十一月五日（外記日記）に、雅子内親王は天曆八年八月廿九日（一代要記）にそれ／＼薨ぜられて居るので此の時北の宮と申上げるのは天徳元年六月六日薨（日本紀略）の康子内親王の御事であらうと思はれる。（九）

と述べられ、以下歌題・作者等に言及されてゐる。最後に堀部氏は、料紙・筆者に就ての考説につづけて、萩谷氏同様仮名日記を引用された末に、

当時右大臣殿であつた九条殿師輔

于時四十九歳

の邸坊城殿に、北宮

皇后の御異稱。師輔の女にして、天徳二年十月村上天皇后となられた安子の事。當時はまだ女御であらせられた。

が行啓せられた時

の催である事がわかる。夫木抄に四番右の歌が見えて、天暦十一年坊城右大臣家歌合とあるが、伝宗尊親王筆歌合総目録・和歌

合抄目録・古今歌合目録等には凡て天暦十年としてゐて、それが正しいであらう。

と記され、伝写本・歌題・作者等の問題にも觸れられてゐる。

堀部氏が言つてゐられる如く、目録類の言ふ日時・場所が一致してゐるので、この歌合が天暦十年八月十一日に九条右大臣師輔の坊城殿で催されたことに異存はなからうが、問題になるのは、この歌合を主催された「きたの宮」即ち「北宮」が誰であるかである。

前掲の如く、久曾神氏の所説は「北宮」を闡明にするよりはこの歌合の披講年代を判然させるために師輔の北の方となられた醍醐天皇の三内親王の薨去年代を問題にされてゐるのであつて、「北宮」を問題とする筆者として隔靴搔痒の感を抱かざるを得ない。但し「北宮」こそ端的に取扱はれてはゐないが、三内親王を焦点に置かれたところより考へるに、「北宮」を「北の方となられた姫宮」の意に解されてゐたのであらう。これに対して萩谷氏の所説は「北宮」の真意を一層積極的に理解されてゐたらしいが、惜しいことに推量に止められてゐる。又、堀部氏の所説は、後述の辞典類の所説に従はれたものか「北宮」を「皇后宮」と誤解され、披講当時まだ女御であられた村上天皇中宮藤原安子に擬定されてゐる。

結局、以上三氏の所説より帰納すれば、所謂「北宮」は康子内親王か中宮藤原安子か何れかの御方になり、然も康子内親王の方は未だ推定の域を脱してゐない。かくて、師輔の邸宅で披講された歌合の主催者が、或は師輔の北の方であり、或は師輔の女でありとする如く二方あるのも異なるものである。

「北宮」に關する辞典類の所説は如何と言ふに、

きたーのみや「北宮」(名) きさいのみや。(広辞林)

きたーのみや(北の宮)(名) 後の宮(きさいのみや)の異称 (言林)

の如き簡單なものと、

きたーのみや(名) 北宮「后町キヤイマツハ内裏中ノ北ノ方ニアリ」皇后ノ御異称。公忠集「北の宮ノ御髮揚ウシゲノボリノ屏風ニ、歌」(大言海)

きたーのみや北宮「名」きさいのみや(后宮)の異称「古語」公忠集「北の宮のみくしあげの屏風」(言泉)

きたーのみや北宮(名) きさいのみや(后宮)の御異称。公忠集「北の宮のみくしあげの屏風に」(修訂大日本国語辞典)
の如く原典を引用したものとがある。

これらの解説から感じられるのは、繁簡の差こそあれ、口を揃へて「きさいのみや」即ち皇后宮の異称とする点と、更に公忠集の「北の宮のみくしあげの屏風(に)」にとの詞書を引用してゐる点とである。

公忠集は校註国歌大系所收の三十六人集に含まれてゐるが、これは流布本を底本とし、群書類従本を参酌してゐる。よつて仮に流布本と呼ぶことにする。三十六人集は他に西本願寺本があり、その本文は飯島春敬・久曾神昇両氏共著「国宝西本願寺三十六人集」(昭和十九年四月越後屋書房発行)中に收められてゐるが、この方を西本と呼んでおく。今、流布本公忠集を検するに、かの詞書は上半のみで、

北の宮のみくしあげの屏風に山を越ゆる人の郭公を聞きたる所に

A 行きやらで山路暮しつ時鳥今一声の聞かまほしさに (夏・一六三九三)
の如く屏風の画題をも併記してゐるのである。尙、同集には、

北の宮の御もぎに

B 皆人のいかでと思ふ萬代の例に君をいのる今日かな（冬・一六四〇六）
と今一首見えてゐる。公忠集に筆が及んだので、他の三十六人集に「北宮」の有無を探つたところ、

或所に北の宮の御裳著の歌ども竹多かる所に

C 年毎に生ひ添ふ竹のよゝを経て変らぬ色を誰とかは見む（一八一七九）
の歌を流布本伊勢集に

きたの宮の御裳著給ひしに内待のかみ殿に贈られたる御屏風に笠取の山
のほとりを入ゆく程に時雨のすれば袖をかづきたる処

D 笠取の山を頼みしかひもなく時雨に袖を濡らしてぞ行く（一九七五二）
の歌を流布本頼基集に於て発見したのである。

この内、Aは拾遺集（校註国歌大系本）の夏・一〇六に公忠の歌として採録されてゐるが、詞書は「北宮の裳着の屏風に」となつてゐる。三好英治氏の「校本拾遺抄とその研究」（昭和十九年三月三省堂発行）に收められてゐる拾遺抄の夏・七二の詞書も同一である。西本公忠集では「このみやのみくしあげの御屏風にやまをこゆるひとのほとゝぎすきゝたるところに」（八）となつてゐる。尙、国宝西本願寺三十六人集中の久曾神氏の研究によれば、伝紀貫之筆部類名家集に包含される源公忠集の一葉（富田家蔵）の詞書は「北宮御着裳屏風」となつてゐる。他にAは古今六帖（校註国歌大系本）・六のほととぎす（三五二八五）・三十人撰（古典文庫・平安稀覯撰集所収）・前十五番歌合・金玉集・三十六人撰（共に古典文庫・公任歌論集所収）等に見えてゐるが、共に詞書が添へられてゐないので、今

は問題にするに当たらないであらう。以上、Aの詞書として挙げたものは各々相違を見せてゐるので、要約すれば、

(1) 対象となつた場合。

イ みぐしあげ……流布本公忠集・西本公忠集。

ロ 裳着……部類名家集本公忠集・拾遺集・拾遺抄。

(2) 対象となつた人物。

イ 北の宮（北宮）……流布本公忠集・部類名家集本公忠集・拾遺集・拾遺抄。

ロ この宮……西本公忠集。

となるであらう。「みぐしあげ」と「裳着」との相違が如何にして生じたか知るべくもないが、同一の歌が場合を異にして屏風歌に使はれるのも異である故、いづれかが誤記であらう。思ふに、「みぐしあげ」は「御髮上」即ち結髪の意で、裳着の如く特殊の儀式ではなく通常行はれるもので、ここは裳着の当日の結髪を指すのではなくからうか。又、「この宮」とは如何にも熟さない文字であるが、恐らく北の草書_カを小の草書_コと誤り、更に「こ」と仮名書きしたと解すれば、西本公忠集の指すところも他書と同じとなるであらう。従つて、Aは所收本によつて詞書の文字に相違があるが、すべて北宮の裳着の際の屏風歌とすべきであらう。

Bに對する西本公忠集の詞書は「きたのみやのおほんもぎに」（二〇）とあつて流布本と異同はないが、新勅撰集（校註国歌大系本）・賀・四五四では「一品康子内親王裳着侍りけるに」となり、三十六人集の所伝と異つてゐる。新勅撰集の詞書に就ては尙言ふべきことがあるが、後に觸れることにする。

Cは古今六帖・四・祝（三三・一九）及び西本伊勢集にも見えてゐる。前者は詞書がないので考慮の外に置く

が、後者は単に「竹おほかるところ」(七六)としか記してゐないので、屏風歌であることは伺へるものの、その場合が何時であつたか知るべくもない。思ふに、同集七四に「亭子院六十御賀、京極の宮す所つかうまつりたまふ御屏風の歌、子日したるところ、松のいとちみさきに」との詞書が見えてゐるので、西本伊勢集の編者の意は、Cの歌が七四の歌の詞書に言ふのと同じ場合と考へてゐたのであらう。ここに訝しいのは、この歌を貫之の歌とする所伝の存することである。即ち流布本貫之集第二に「延長四年九月二十四日法皇御六十賀京極御息所の仕うまつり給ふ時の御屏風の歌十一首」の第十一首(一七四一三)に見えてゐるが、単に「竹」と詞書があるだけである。西本貫之集即ち紀将歌集・第四には「延長四年九月廿四日法皇御六十賀、京極御息所被_レ奉仕_二時屏風歌_一」の一連の最末第十一首(三五〇)に同じく「竹」の詞書の下に收められてゐる。尙、この歌は新古今集・賀・七一五に見えてゐて、作者は紀貫之、詞書は「延喜の御時屏風の歌」となつてゐる。一首の歌に対して二様に作者を伝へてゐるのは不可解であるが、それを考へる場合でないでここには詳述を避けておかう。只、作者を貫之とする側では凡て宇多法皇六十御賀の際の屏風歌としてゐるのに対して、伊勢とする側では或は北宮の御裳着の際のものとし、或は宇多法皇六十御賀の際のものとする等所伝が区々である。確証はないが、恐らく宇多法皇六十御賀の際のものではなかつたらうか。

D に対する西本頼基集の詞書は「きたのみやの御もぎたまうしにないしのかむのとおくられたる御屏風に、かさとの山を人のゆくほどにしぐれのすればそでをかづきたるところ」(八)と大同小異である。然るに風雅集(校註国歌大系本)・冬にこの歌を採られた際、「均子内親王の裳着侍りけるに尙侍淑子に送りける屏風に笠取山のほとりを人行く程に時雨のするに袖をかづきたる所」(七三四)と詞書を改められてゐる。一代要記(改定史籍

集覽本）に従へば、尙侍淑子は中納言藤原長良の女で左大臣藤原氏宗の室となつた女性で、その尙侍に任ぜられたのは、元慶八年（八八四）四月であり、延喜六年（九〇六）五月廿八日に六十九歳で長逝した際任を終えてゐる。一方、均子内親王は宇多天皇第一皇女で延喜十年（九一〇）二月廿五日に薨ぜられてゐる。日本紀略（新訂増補国史大系本）によると御享年廿一歳であられた故、寛平二年（八九〇）の御誕生となり、御裳着の時期は醍醐天皇の御代に入つてゐたらう。西本躬恒集によると、「延喜三年十月十九日おはせによりてうたみつたてまつる、女一のみこの裳きたまふときに、うちよりさうぞくたまふそのものにみずぐきがたきにすれるうた」との詞書の下に三首（一——三）收められてゐるので、女一宮即ち均子内親王の御裳着は延喜三年（九〇三）十月十九日となるが、この時期とすれば尙侍淑子が均子内親王の御裳着の料の屏風を贈られることも有り得るので、風雅集の言ふところも信じられなくもなからう。但し、風雅集は延喜時代より遙に時代の降つた南北朝時代の撰集のこととて、時代的距離より信憑性は西本頼基集の方が富んでゐるであらう。それからあらぬか、大日本史料は承平三年（九三三）八月廿七日の条にこの歌を援用してゐるが、いふところの内侍のかみを満子に当ててゐる。例によつて一代要記に就て満子の経歴を探るに、満子は内大臣藤原高藤の女で、醍醐天皇・後宮の条に淑子の次に並んでゐる。満子の内侍のかみ即ち尙侍に任ぜられた日は同書に明記されてゐないが、本朝世紀（新訂増補国史大系本）の天慶元年十一月十四日の条に「延喜七年二月七日以藤原満子為尙侍」と伝へてゐるので、この日時は信じてよからう。満子は承平七年（九三七）十月十三日年六十五を以て長逝してゐるので、この日まで在任してゐたのであらう。従つて、大日本史料が承平三年の条にこの歌を援用するに際して、内侍のかみを満子としてゐても異論は生じないであらう。因に、この歌は古今六帖・五のかさ（三四三〇五）に見えてゐるが、作者は記されず、詞書も闕けてゐるので問題とするに当らないであらう。

北宮に觸れた詞書を持つ歌は、三十六人集では中務集に尙三首見えてゐるが、暫く觸れないことにする。三十六人集以外では、先にAに就て述べた如く拾遺集があるが、前述の外に次の如き二首がある。

きたの宮の裳着の屏風に

E 春ふかくなりぬとおもふを桜花ちる木のもとはまだ雪ぞ降る (春・六三) 貫之

北宮の屏風に

F としつきのゆくへも知らぬ山賤は瀧のおとにや春をしるらむ (雑春・一〇〇三) 右近

Eはいづれの貫之集にも見えない歌であるが、今暫く拾遺集の言ふところに従つておかう。因にこの歌は拾遺抄(三好氏校本)にも「北宮の着裳屏風歌」(四四)との詞書を添へて採られてゐるので、今暫く拾遺集の所伝に従つておかう。Fは拾遺抄(三好氏校本)に見えず、別に言ふこともないが、単に「屏風に」とあるので、多分御裳着の折の歌であつたらう。勅撰集と言へば、新千載集(校註国歌大系本)にも、

北の宮の裳著におとどの贈物の屏風に舟にて浮草とる所

G 根をたえて水に浮きたる浮草は池の深さを頼むなりけり (雑上・一六五九)

との伊勢の歌がある。これは古今六帖の六・浮くさ(三四六七九)及び図書刊行会版丹鶴叢書本萬代集・雜三に收められ共に伊勢の作としてゐるが、六帖には詞書がなく、萬代集には単に「題しらず」となつてゐる。勿論、伊勢集に收められてゐるが、流布本では「浮草舟にて取るところ」(一八一八四)・西本では「うきくさの、ふねにてとるところ」(七八)との詞書を持つてゐるだけなので、その作歌動機を知るべくもないが、流布本伊勢集に於けるその直前の

H 古の心し絶えず行く水にわがまつ影も今日こそは見れ

との歌の詞書、「此の宮の裳著給ふに院其の大臣の贈物に御屏風の和歌奉れるかぎり」によつて考へるに、G・H両首は同時期に作られたものと看做してよからう。さりながら、この詞書には「此の宮」とか「院其の大臣」とか諒解に苦しむ文字があるので、一応西本伊勢集に就て見る必要があらう。即ちHの歌のそれとしては「きたの宮の御もたてまつるにかむのおとゞの御送物の御屏風こゝにたてまつりたまふにより」（七七）である。尙、新校群書類従本伊勢集の詞書は各々「北の宮の御もたてまつるに、おとゞの御送物の屏風の歌水のつらに松ある所」及び「舟に乗りてうき草とる所」である。この内、Hは古今六帖の五・昔あへる人（三三七七〇）に採られてゐるが、詞書を闕いてゐるので問題にするまでもなからう。筆を元に返してHに對する伊勢集の詞書に就て考へるに、かの流布本にいふ「此の宮」は西本の「きたの宮」・類従本の「北の宮」と相應するもの故、「此」は「北」と字形相似てゐるので、流布本が誤記したと言へるであらう。尙、その理由は不明であるが、Hは中務集に見え、流布本（二〇八二四）では「松の下に水やれり」、西本（六七）では「まつのしたにみづやれり」と同工の詞書が添へられてゐることを附記しておく。

以上A——Hの六首によつて北宮の御裳着に關係のある歌は尽きるが、他に北宮關係の歌がないでもない。即ち流布本高光集の

小宮かくれ給へるころ

I 世の中はかくこそ見ゆれつくぐと思へば飯の宿りなりけり（一九四六三）

おはん葬送の後

J 頼みこし常磐の山も大空の霞に霞むよにこそ有りけれ (一九四六四)

おなじ頃おはん服にて七月七日のことにやありけむ

K 七夕の渡るせも有らじ天の川藤の衣の満てる夜なれば (一九四六五)

といひしかば

L 鵲の橋ながれなば藤衣きしより身をや誰もすつべき (一九四六六)

等四首である。西本高光集ではそれぞれ次の如き詞書となつてゐる。即ち、「きたのかたかくれたまへるころ」、「(一二)」、「御さうさうのゝち」(一三)、「おなじころ御ぶくにて、七月七日」(一四)、「といひしかば」(一五)であるが、ここに問題にすべき異同の主なものゝIのそれで、流布本の「小宮」と西本の「きたのかた」との相違である。つづいてこの相違を考へるべきであるが、その前に、この四首が他に見えてゐるか否かを探つて見よう。

K・Lは他に所見はないが、Iは統詞花集(校註国歌大系本)の雑下に收められ、「きたのみやかくれ給ひつる比」と詞書に北宮と明記してゐる。尙、Iは統古今集(校註国歌大系本)・哀傷に「世の中はかなく聞えける頃」(一四五〇)との、Jは統後拾遺集(校註国歌大系本)・哀傷に「たのみて侍りける人まかりて後のわざし侍りける夜よめる」(一二二六)との詞書をそれぞれ持つてゐるが、共に今のところ参照するに役立たない。従つて、これらを考慮の外に置いて両高光集の詞書の相違を考へるに、直に念頭に浮ぶのは「小宮」と「きたのかた」は同一の女性であらうが、この場合「きたのかた」はともかく「小宮」はその真意を掴み難いので、恐らくこの間に何等かの錯誤があるのではなからうか。即ち先にAの場合に考へた如く、北—小の草書による誤記があつて、北宮を小宮と誤つたのではなからうか。

今まで取扱つて来た北宮に關係のある歌は A——H の御裳着に關する六首と、I——L の御永眠並にそれ以後に關する四首とに二大別出来るであらう。そして、前者に対しては会々 B を採録した新勅撰集が北宮を「一品康子内親王」と御実名を明記してゐるので、同集が鎌倉時代初期の成立ながら、「……天慶九年五月五日叙一品……天徳元年六月六日薨年三十八准后後配右大臣師輔生公季」との一代要記の記述と一致するので、かの坊城右大臣殿歌合の主催者として恰好であらう。即ち同歌合の仮名日記の時期・場所・主催者等に就ての条件と一致してゐるからである。先づ時期であるが、天徳元年はこの歌合の催された天暦十年の翌年である故、当然康子内親王は御健在であつた。場所の坊城殿は九条右大臣藤原師輔の邸宅であるが、ここを使用された方として康子内親王は師輔の北の方であられた故最も条件を満足されるであらう。仮に以上の私案が許されるなら、A——H の八首の詞書が問題にしてゐる「北宮の御裳着」は康子内親王の御裳着であつて、その日時は大日本史料が日本紀略・河海抄所引太后御記・西宮記等に基いて充ててゐる承平三年八月廿七日のことであつた。ここには日本紀略の

先帝第十二康子内親王於常寧殿初筓。即敘三品。

との同日の条を引くに止めておかう。

かくて「北の宮の御裳着」との詞書を持つ A——H の八首の歌の詞書の対象とする人物を康子内親王と比定出来ても、直に I——L の四首の詞書が対象としてゐる北宮に比定してよいとは言へないであらう。

西本高光集が北の方の服のうちに七月七日が廻つて来たと言つてゐるのであるから、逆に考へれば、この北の方は七月七日以前、最大限四十九日以前に亡くなつたことになり、五・六月頃の永眠となるであらう。高光自身の北の方の忌日は不明であるが、仮に父師輔の北の方の忌日を一代要記によつて探るに、

勤子内親王——天慶元年（九三八）十一月五日薨。

雅子内親王——天曆八年（九五四）八月二十九日薨。

康子内親王——天德元年（九五七）六月六日薨。

等の醍醐天皇の皇女が師輔の北の方となられてゐるが、前記の条件を満足させるのは康子内親王御一方である。尊卑分脈によると高光は雅子内親王の御所生であるが、内親王の薨去後御妹の康子内親王が師輔の配偶になられたので、高光は康子内親王を母代としてゐたと思はれる。或はこの間の消息は統後拾遺集・哀傷一二六の詞書より伺へるのではなからうか。続古今集・哀傷一四五〇の詞書では作歌時期を詳にし難いものの、西本の詞書と流布本のそれとを対応させる時、北の方即ち小宮となり、然も北の方が康子内親王と考へられるので、先に御裳着の場合考へた如く、その北宮が康子内親王に該当する故、この小宮は北宮の誤記と考へてよからう。

かくて、裳着の歌の北宮も永眠・御葬送等の歌の北宮も同一女性で、藤原師輔北の方康子内親王の御事とする
と

きたの宮のうちに奉り給ふ扇に

M 君が手に任する秋の風なれば靡かぬ草は有らじとぞ思ふ（二〇八八一）

N 袖の浦の波吹き返す浜風は雲の上まで涼しかるらむ（二〇八八二）

との流布本中務集の詞書が持つ「きたの宮」も自ら明かであらう。両首共に西本中務集にも見えてゐて、詞書には異同はない。明かと言へば、康子内親王及び中務の活躍時代から考へて、扇をうちに奉りたる時期は史料には見えないが、村上天皇の御代ではなかつたらうか。暫く、A——Hの一群とI——Lの一群との中間に置いておかう。

かく事煩はしく考証せずとも、新勅撰集・賀・四五四の公忠の歌の詞書に従つて直に一品康子内親王の御事とすべきであつたかも知れない。然し、短歌に即した場合、久曾神、萩谷・堀部三氏の所説の如く区々或は臆測に止つてゐるので、一応検討したまでである。従つて、冒頭に掲げた三氏の所説のうちで、正鵠に近いのは萩谷氏のそれなのである。

或はかく短歌といふ一小部分に止らないで、もつと視野を拡げ文学一般に眼を注ぐべきであつたかも知れない。即ち、

九条殿シノビテキタノ宮ニカヨヒ給。イマダ人モイタクシラザリケルニ、正月一日小野宮殿ウチニマイリテ、九条殿ニアヒタ
テマツリテ、北ノ宮ノ拝礼ニマイラムト思ニ。雨ノフリテオマヘノキタナクテ、エ参リ侍ラズトノ給ケレバ、九条殿顔スコシ
アカラメテゾオハシケル。閑院太政大臣公季トキユルハ、此宮ノウミ給ヘル人也……（第二・臣節）

との続古事談（新校群書類従本）の記事に即した方が捷徑であつたらう。新校群書類従本は「キタノ宮」の右傍に「康子」と註し、更に続古事談を康子内親王薨去の項に引用した大日本史料は同じく右傍に「康子内親王」と註記してゐるからである。続古事談は鎌倉時代の作品である故、その所説を直に信ずべからずとするなら、

……このおほき大臣の御母上は、延喜の帝の御女、四ノ宮ときこえさせき。延喜いみじう時めかせ、おもひ奉らせ給へりき。
御裳著の屏風に公忠ノ辨

ゆきやらで山路くらしつほととぎす今ひとこゑのきかまほしさに

とよむはこの宮のなり。貫之などあまたよみ侍りしかど、人にとりては、すぐらののしられ給ひしうたよ。二代のみかどの御妹におはします……（中） 公季

とかのAの歌を先立て続古事談の話を伝へてゐる徳川本を底本とした岩波文庫本大鏡に就て見るがよからう。公季に関する徳川本の一節は、

このおとど、今の閑院のおとどにおはします。これ九条殿十一郎君、北の宮ばらにおはします……

に始つてゐる。この部分は桂宮本大鏡（古典文庫本）も大同小異で、同じく「北の宮ばらにおはします」と作つてゐる。但し、他の系統本例へば校註国歌大系本では「……御母、宮ばらにおはします」となつてゐる。一方、岩波文庫本の「北の宮」には右註はないが、かの「延喜の帝の御女、四ノ宮」の註とらしく、裏書に、

康子内親王

醍醐天皇第四皇女、母皇后櫛子昭宣公女也、朱雀、村上之同母妹也

とあり、大鏡裏書（新校群書類従本）にも同文が見えてゐるので、北宮——公季母——醍醐天皇第四皇女——康子内親王の關係をたどれば、北宮即康子内親王となるであらう。

文学作品に現はれてゐる北宮は以上で尽きるが、他に北宮との御称呼を記したものに願文集（大日本史料所引）がある。即ち天曆十一年七月廿三日の年紀を持つ菅原文時の作で、「北宮御卅九日願文」との標題の下に、

（先カ）
右長公主殿下、瑤水分派、瓊林連枝、蕙口蘭儀之常、治粧於勝臺之袖、花前月下之友、養艶於摩耶之窓、自從長樂昔春綺羅哀

来、永安故地風塵恩断、失時之臣、只慰陽於心水之曲、恋古之妾常、

（脱アラン）
（出カ）

身於常山之河、於是年給之准三宮也、遺老潛待雨露之

次、別封之余千戸也、旧仕併飽湯沐之余、豈國大夢早驚於華殿之深邃、長暮無曉、隔松墀之蕭条、嗚呼鳳台雲散之初、空遺金

印藏

卯、仙圃風悲之後、永絶玉音、方今平陽第裏、層心之悼未休、申陰期終……（七）

と哀切の情を述べてゐるが、恰もこの翌廿四日は康子内親王の四十九日の正日に当るので、その御法事に用ひられたものであらう。大日本史料は標題の「北宮」の右註として「康子内親王」と記してゐるが、仮にこの註記がなく

とも、文中の「右長公主殿下」及び「中陰期終」と「天曆十一年七月廿三日」との年紀等を彼此照応させ、更に康子内親王の薨日とを併せ考へることによつて、いふところの「北宮」が康子内親王に該当することは自ら明かであらう。

縷々述べ來つて、漸く北宮を康子内親王に比定すべきことを知り得たが、かく煩瑣な考証を試みなければならなかつたのも、偏に事を国文学の領域内に於て処理しようとしたからである。いはば国文学と一小域内に止り広く視野を他の學問の領域に転じなかつたために起つたのであらう。従つて、若し最初から他の領域に就き、それより轉じて国文学界全体に視野を投じてゐたら、或はもつと端的に解決を見たであらうと思はれる。今更ながら国文学と国史學とが乖離し分業的になつてゐることに對し感慨これ久しうしたのである。その分業的態度が今少し緩和されてゐたならば、かくの如く長文を弄する必要はなかつたらう。又、既往に於て国史學を参照する用意があつたなら、大日本史料がかの公忠集の歌（一六三九三）にいふ北宮を正しく解釈してゐるのであるから、辞典類も皇后の御異称と普通名詞に解せず、北の方となられた姫宮或は内親王で、九条右大臣藤原師輔北方康子内親王の御異称と固有名詞として取扱つたことであらうし、久曾神、萩谷、堀部三氏も明確に北宮を康子内親王と断定されたことであらう。

— 一九五三・三・二五 —

附記 註を附すべき事項もないが、紙數に制限があるために凡て省略しておいた。そのために叙述が概念的になつたが諒とされたい。出来るならば康子内親王の御経歴を記したかつたが、これ亦長文になる虞があるので割愛した。他日好機を得て内親王の御経歴を草したいと思つてゐる。尙、Aの歌は倭漢朗詠集（岩波文庫本）の上・郭公にも見えてゐるが、詞書を欠いてゐるので問題とするに値しないであらう。又、西本中務集に出てゐるM・N両首の位置は一二三・一二四である。共に

本文に於て言ひ漏したことを校正の際に発見したので、ここに追記しておく。

再記 公卿の日記の何処かに「北宮」が出てゐたことを記憶してゐたが、脱稿までに典據を確實に思ひ出せなかつたので、気にはなつてゐたものの態と触れずに置いた。ところが、その後、偶然なことから小右記（史料大成本）の長和四年（一〇一五）十一月五日の条にあることを発見したので、次に引用しておく。

……左大將可被合女二宮之事、更不可知、雖有仰事不申左右、大將妻母尼^{之カ}、水漿不受、流淚悲泣云々、□者主上思立事也、所被仰之例、故北宮例云々、奇也、惟也、邑上先帝不知食之事也、李部可立給太子之御計云々、太不便也……

ここにいふ事件は時の主上三條天皇が皇女禊子内親王を左大將即ち藤原教通（道長三男）に降嫁させようとされたことに係つてゐる。ために教通の北の方であつた藤原公任の女及びその母が心を痛め歎き悲しんだが、このことは第一皇子式部卿敦明親王を次代の東宮に立てようとの御計であるといつてゐるのである。その間の詳しい経緯は榮花物語（岩波文庫本）の「玉の村菊」の巻に見えてゐることだし、当面の問題ではないのでここには触れないことにする。問題は「所被仰之例、故北宮例云々、奇也、惟也。邑上先帝不知食之事也」の一節である。これに就て、高群逸枝氏は「招婿婚の研究」（昭和二八年一月・講談社発行）に於て、

……故北宮例とあるのは、村上皇女保子内親王が、父天皇崩後、道長の父兼家を婿取つた例をいうのであらう……

（五一六頁）

と述べてをられる。「北宮」を普通名詞と解すれば、北の方となられた姫宮である故、高群氏の所説の如く、保子内親王に比定しても支障はなからう。然しこれを固有名詞と解すると、異論が生じるのである。即ち、筆者の囑目した範圍では保子内親王を北宮とする文獻は一つもないので、むしろ康子内親王に比定すべきではなからうか。保子内親王が父帝の崩後降嫁された事実

より、小右記の本文の「故北宮例……不知食之事也」に対して、更に同氏は前引の一節の稍々後文に於て、

……「小右記」の記者が、「奇也、怪也。」といっているのは、当代の天皇が、自ら主婦者となつて、婿取をする点をいうのである……（…五一六頁）

との解釈を下してをられる。恐らく高群氏の解釈は「村上天皇——保子内親王——藤原兼家」の線のみに留意され、村上天皇の皇妹康子内親王の存在を忘れられたために生れたものではなからうか。康子内親王の御降嫁当時村上天皇は御在位中であつたが、内親王の御降嫁が大鏡に述べられてゐる如き事情であつて見れば、村上天皇は禊子内親王の場合の三條天皇の如く主動的に関与されなかつたらうと思はれる。従つて、小右記の筆者のいう「奇也、怪也、邑上先帝不知食之事也」並に高群氏の「小右記の筆者」以下の解釈も、康子内親王を主体としても充分意を達することが出来よう。左右対応させて、小右記のいふ「北宮」を、筆者は康子内親王に比定しようと思ふのである。